

幼稚園教育の現状と課題

— 子ども・親・プリサービスの観点から —

志 賀 智 江

〔キーワード〕 幼稚園教育, 幼児理解, プリサービス

はじめに

教育関係法規および指導要領・教育要領の改訂が続いた。特に、戦後教育の基本路線を決めていた教育基本法や学校教育法が改訂されたことは、幼児教育の関係者にとって、戦後60年間の教育を振り返り、社会の変化に合わせた教育の在り方や保育の今後の課題を考え、幼稚園・保育園の役割を検討する好機となった。さらに、教育職員免許法の改訂もあり、更新講習制度など、教員としての専門性を高めるための施策が打ち出されている。

幼稚園教育の現場は、幼稚園に集う子ども一人ひとりが心身ともに豊かに伸びてゆけるよう、その生活を保障し援助するために、日々実践活動を展開している。近年、「子どもたちの育ちの変化や社会の変化が大きい」と言われているが、その実態はどのようなことであるのか、具体的に検討する必要性を感じる。

そこで本稿では、幼稚園教育の中心である子ども、保護者に焦点を当て、その実態を探るとともに、保育者を目指すプリサービス段階の学生の実態を明らかにしながら、幼稚園教育の問題点と今後の課題を検討していくものである。

1. 子どもの実態

1) 最近の子どもの特徴

最近の幼児の具体的な事例から、子どもの様子や行動がここ2, 30年の間に少しずつ変わってきていることを列挙してみたい。

(1)「生活習慣の自律が遅れている子どもが目立つ。」

紙おむつの普及による部分が大きいが、オムツのとれ方が遅くなってきているのは周知の事実である。20年くらい前までは、子どもは2歳6ヵ月になれば夜のオムツも必要がないとされてきたし、3年保育の入園までには、オムツが取れていることはごく普通の一般的なことであった。しかし今では、年少組・3歳児組の一学期は、オムツをつけたままの子どもがどの園でも見うけられるようになってきた。さらに、年中組・年長組になってもトイレに自分で行けない子どもやトイレをいやがる子ども、用便の始末ができない子どもも出てきている。

その他、衣服の着脱・靴を履くこと、用具の整頓と片付けなど、以前の幼稚園生活では幼児全員ができていたことであるのに、できない子どもがふえてきている。

原因としては、いくつかのことが考えられる。

- ① 家庭では、子どもが自分でやる癖が付いておらず、ついつい親が手を出してやってしまう場合が多いようである。
- ② やり慣れていないために、手先が不器用で、自分でやるのが面倒になってしまう。
- ③ 生活習慣を身に付けるためには、親や保育者が地道に少しずつ心をかけて、子どもの身に付くようにする必要があるが、オムツの例に見るように、便利なオムツにはお金をかけるが、オムツをはずすための心と手をかけることは怠る親が多い。

(2)「鬼ごっこで鬼になった子どもが、捕まえられないとすぐに鬼の役をやめてしまったり、泣いてしまう。また、自分が失敗したり、ケンカになると不安定になりやすく、いつまでも泣いたり、ヒステリックになる子どもがいる。」

子ども同士で遊ぶ機会も仲間も少なくなった今、幼稚園や保育園という場所だけが同輩と会える所となった現在の日本では、自分に不利になったり我慢し

なければならぬ場面に耐えきれない子どもが多く出てきている。

友だち関係が少ない今の子どもたちの状況を勘案して、親や保育者は、長い目で幼児一人ひとりの社会的発達・人間関係の形成を意図した適切なかかわり方や指導を考えていくことが必要となる。

(3) 「転び方がへたになり、とっさに手が出ず、額・口・鼻を打つようになった。」

子どもたちは以前に比べて、外遊びや体を使って遊ぶことが少なくなっている。そのため、体力が付かない、筋力が弱くなった、持久力が無くなった、ころびやすくなったなどが指摘されている。

社会的には、池田小事件や公園における遊具の事故の影響もあり、幼児を対象とする施設に関しての「安全」管理が過剰とも思えるほど細やかなものとなってきた。幼稚園に関する施策の一つは、「幼稚園設置基準」に示されているが、改訂に当たっては、これまでの「指導上、保健衛生上、管理上適切なもの」に加えて、「安全上」の語が至る所に多数入ってきている¹⁾。

また、遊具の事故がたびたび報じられると、「安全確保」のためにそうした遊具を園や公園から撤去するという事態が続いている。こうして日本の幼児の遊び環境は、「危険物の除去」を優先するあまりに、子どもの意欲・冒険心を育てる試みを一切許容しない社会になりつつあるといえることができる。

(4) 「神経質な子どもが多くなり、おなかが痛い、気持ちが悪いと訴える。」

少しの擦り傷やかゆみでも職員室に来る子どもが増えてきた。以前の子どもたちは、「これなら放っておいても大丈夫」とか「このままで何もつけなくても大丈夫」という保育者の言葉で安心してしたが、今の子どもたちは、薬を塗ったりバンドエイドなどの処置をしないと納得しない子どもが増えている。

(5) 「暑さ・寒さに対して弱くなった。」

「暑い、暑い」、「寒い、寒い」とすぐ口に出して、我慢できない子どもがい

る。暑ければ汗を拭いたり何かであおぐ、とか、寒ければ手や顔をこすって寒さを吹き飛ばすなど、その場をしのぐ対策が思いつかない子どもが多く見られるようになった。これは、幼稚園や学校でも冷暖房完備になってきたように、快適な生活様式に慣れきっているため、忍耐力や抑制力が弱くなっている一端を示していると思われる。

(6) 「人の話をよく聞こうとする態度が弱い。また、遊びのおもしろさを発展させていくような気力や工夫する力が弱く、あきらめやすい。」

幼児が話を聞いて物語のおもしろさを知ることや集中して話が聞ける力は、幼稚園教師の保育方法や展開次第で、幼児にその力をつけることはできるので、教師の指導に俟つところも多い。しかし残念ながら、子どもの多くは、集中力・忍耐力・工夫する力が弱くなってきており、こうした力を培うことは、これからの幼児教育の大きな課題となってくる。

特に、人の話を聞こうとすることや、物語の楽しさがわかるようになることは、就学後につながる基本的な力の一つとして、保育者も保護者ともに幼児期に育てたいものである。

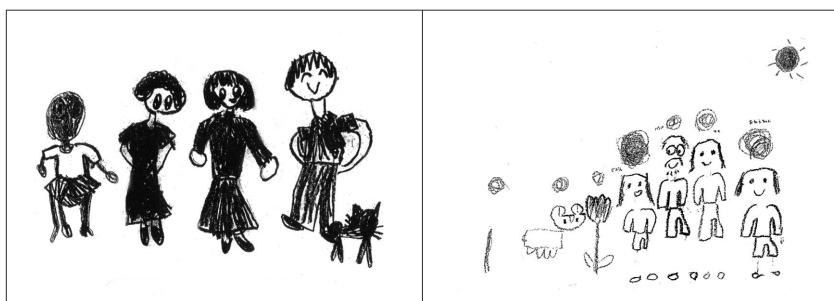
(7) 「心の動きを子どもの言葉で表現できない子どもが増加している。」

たとえば、「うれしい」、「楽しい」、「きれい」など、自分の口から出てくる言葉が少ない。これは、入園前に子ども同士の交流が少なかったり、子どもの分まで何でも大人がやってしまう、大人が言ってしまうという生活が影響していることも原因として考えられる。また、他の要因としては、大人の世界でも表現するための語彙は近年非常に少なくなっており、「すごい」「やばい」の語ですませてしまうなどの状況が多く見られる。

子どもは、自分の周辺の大人から何でも吸収してしまうので、言葉や表現についても、大人の生活自体を豊かにすることが大事であり、どこから子どもたちに吸収されてもいいようにしておく必要があると思われる。

(8)「ごっこ遊びに犬や猫の役割をやりたがる子どもがたくさんいる。」

先年、「おうちの人」を描いてもらったところ、家族と共に猫や犬を描いた子どもが数名いたが（絵参照）、最近のごっこ遊びでは、自分がやりたい役割として、「おとうさん」、「お母さん」、「あかちゃん」のほかに「犬」、「猫」になりたい子どもが多く見られるようになった。多くの園の先生方から報告されているところであるが、お父さん役やお母さん役ではあまり会話が出てこない子どもの場合でも、あかちゃん役や犬や猫の役になると、甘えたりとてもおしゃべりの状態になる。



子どもの絵に見る家族像に犬や猫が

2) 子どもをとりまく環境とその影響

子どもたちは、周囲の環境に働きかけ、また、その環境の影響を受けて成長していく。

日本の子どもをとりまく環境を考えていくとき、世界の子どもたちに比べて満ちあふれるようにたっぷりあるものを先ず考えてみると、その一つは、経済的な余裕からくる物質的な物量の多さであり、その二は、情報の多さと豊かな情報機器に囲まれているという、情報付けの状況である。

(1) 経済面・物質面での裕福な環境

今の子どもたちを取りまく環境は、経済面から見れば、生まれたときから衣食住には何不自由のない生活をしており、義務教育期間には学習に専心できる

恵まれた状況下にある。

こうした環境の中で育つ日本の子どもたちの多くは、たくさんの玩具、食べ物、衣類などに囲まれ、生まれたときから消費文化の中で生活しており、物があふれている便利で楽しい生活に慣れきっている状況である。

こうした環境が子どもへ与える影響としては、ものを大切にしない、創意工夫が足りない、集中力が付かない、安易な生活を志向するようになる、などが心配されている。

このように経済的には豊かで物質的には困らない状況であっても、精神的には不安定な子どもが増加しており、経済効率優先や便利さ重視のために、精神的な面や人間的な面を軽視する風潮も出てきている。

こうした物質的には豊かな環境の中で、お金や物や成績では換算できない精神的な大切なことがあることや、人間一人ひとりがすばらしい価値ある存在であることの重要性を幼児にどのように伝えていくかは、これからの幼児教育の大きな課題となる。

(2) 情報社会と幼児への影響

電子技術の発達や経済的な余裕があるために、日本では、情報メディアが多く利用されており、多くの知識や情報を居ながらにして獲得できる状況下にいる。

これからの社会は、ますます情報社会への進展が予想され、そこでは幼児が知らず知らずのうちに情報付けにされる状態が続くわけであり、情報社会が子どもにもたらす「ゆがんだ情報経験」と「思考力の退化」に十分配慮しておく必要がある。

日本の子どもたちのメディア漬けは「世界一長い」といわれており、それは乳幼児期から、からだの発達、ことば（コミュニケーション能力）の発達、こころと脳の発達など、多くの面で人間としての発達を妨げていると考えられる。

(3) 子どもの遊び環境

子どもは、遊びを通して多くのことを学んでいく。しかし、日本の子どもたちに「遊びの3間（遊びの空間・時間・仲間）が足りない」と言われて久しい。子どもにとって、遊びは大変重要なものであり、子どもは毎日の遊びを通してこそ、自他の区別や役割認識、自己抑制と自己表出、協調性や競争意識、さまざまな知的関心の深まり、友だち関係など、多くのことを学習することができる。

今子どもたちに与えられている遊び環境は、成長発達にとって多くのマイナス要因を抱えているが、それらを十分勘案して、良質の遊びの場と時間と仲間をどのように確保し充実させていくかが、子どもの遊び環境を考える際の大きな課題となる。

(4) 幼児をとりまく自然環境

さらに、子どものまわりの自然環境が減少していることは、自然への興味関心や自然とのかかわりの機会を減少させていることにもつながっている。便利で快適な電化生活や車社会の中では、幼児は自らは動こうとしないで受け身の生活をする事になりかねない。

自然環境の減少による問題点の身近な例を挙げてみよう。

- ① 多忙な生活と電化は、人間の生活を早寝早起きから夜型人間に変えている。

日本の子どもたちの夜型傾向は驚くばかりであり、1歳から7歳までの50%以上が10時過ぎに就寝という統計がある。「夜型の子どもの登園・登校後の朝9時頃のからだの状況は、朝型の子どもの（朝4時頃の）熟睡状態と同じ状況である」ことは小児科医師が警告を発しているところである（図1参照）。これは、夜型の子どもは、一応時間どおりに登園・登校していても、体全体は（朝4時頃の）寝ている時と同じ状態であり、体が目覚めていない状態でノロノロ動いていることを示しているのである。こうした夜型傾向が続くことは、幼児にとって心身を蝕む大変な異常事態で

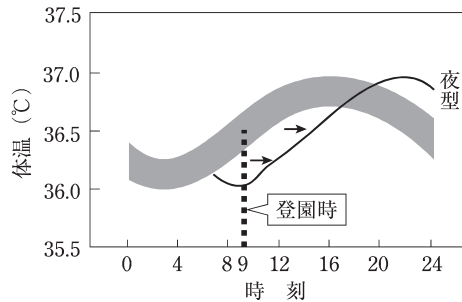


図1 人の体温の日周期リズム

あることを、幼稚園側からも保護者に警告を発する必要がある。

- ② 冷暖房機の普及は、人間が本来持っている体や皮膚の調節機能を鈍くさせている。
- ③ 都心では、星空が見えなくなって久しい。高層住宅の生活にあっては、晴天・雨天という気象状況は、生活とはまったく無関係になりつつある。
- ④ スーパーマーケットに行けば、四季には関係なく一年中あらゆる果物や野菜や魚が並んでおり、お金を多く出せば世界中の産物が居ながらにして手に入る時代と環境にある。
- ⑤ 特に幼児にとっては、自然環境における遊びの機会が減少している。子どもたちにとって、土、草、水、小動物に触れることができる遊び空間は必要であり、都心では、幼稚園で遊ぶときだけがそれらに触れる唯一の機会となる子どもたちが増えてきている。

幼児期における感覚教育の重要性については、かつてルソーやフレーベルも言及しているが、自然環境が少なく、何でもすぐ手にいれることができる便利な文化生活の中で過ごす最近の幼児にとって、その五感をどのように育てていくのか、五感をどのように用いて幼児教育を進めていくのか、そうした大きな課題を解決するための対策を検討することがますます必要になると思われる。

(5) 幼児と人間関係

核家族化と少子化が進む日本においては、幼児の人間関係の上で次の傾向が見られる。

- ① 家庭においては、姉妹兄弟が少なくなっていることや、核家族の中で幼児が年配者（祖父母など）から学ぶ機会が少なくなっており、社会性の発達や生活の知恵を学ぶ機会が減少している。
- ② 地域や学校においても、同輩の仲間や異年齢の子どもが少なくなっており、遊ぶ機会が少なく、人間関係や社会規範を学習する機会が減少している。
- ③ 直接的な人間関係を面倒に感じたり、人間関係に変わる代用品ですませる傾向が出てきている。例）テレビに子守をさせる。歌や話を肉声でなく、カセットに任せるなど。
- ④ 親の世代においては、親自身の自己実現の希求が強くなり、子どもとの時間や育児に時間を割くよりも、自分自身の欲求充足のために時間を使いたい親が増加している。

このように、幼児はあたたかい人間関係を求めているにもかかわらず、その現状は、人間に変わる殺伐とした代用品で補おうとする「関係希薄化」の方向へとますます動いているようにみえる。特に幼児期は、安定した人間関係の中で、幼児は精神的に安定して周囲から吸収していくことが必要であり、幼児期に培われたものがその後の人格形成に大きな影響を及ぼすことを考えると、幼児期における人間関係の体験と学習については、早急の検討と方策が必要となる。

3) 子どもの現況に見る問題と課題

このように、子どもをとりまく環境とそこで成長する子どもたちの現況は、次のような大きな問題を抱えていることが再確認できる。

- ① 子どもたちは、体を十分に動かす環境にはいないので、体力・気力とも十分に発達していない。以前に比べて、体力水準の低下が目立つ。

幼児の現状は、園から帰宅すると、あまり外に出ないで、室内でテレビ

やゲームに没頭していることが多い。こうした、外で体を使う遊びが減少している現状を改めることがまず必要であり、幼児期にこそ、体を適度に使う遊びを心掛けることが今後の課題となってくる。

- ② 生活習慣の確立が不十分である。以前に比べて、確立の時期も遅れている。幼児の周囲の大人（保育者・保護者・その他の周囲の大人）が協力して、幼児の生活習慣の自律を促し、生活習慣の確立を図ることが大切である。
- ③ 人間関係の形成が困難かつ不得手になっている。幼児期にさまざまな人間関係を豊かに経験しておかないと、それ以後はその学習はますます困難になりやすい。今の子どもたちにとって、人間関係の形成については、幼児期に意識して取り組む必要がある。

2. 親の実態

子どもは、親の元に生まれ、その家庭環境の中で、多くのことを吸収して成長していく。その点で、子どもにとっての親の影響は計り知れないものであり、その親子関係は強固なものである。そういう親子にとって、幼稚園生活は、家庭生活から出て最初に出会う社会生活の場となるものである。親にとっては、子どもはどんな子どもでも、「目の中に入れても痛くない」ほどかわいい存在であり、自分の子どもを大切に思っている「親ばか」といわれる心情は、親としての自然の感情である。そうした点で、幼児教育の場合は特に、幼児の後ろには親がいること、幼稚園教育と家庭教育は車の両輪のようにお互いの理解と協力で成り立つことを重視することが大切である。

「モンスターペアレンツ」という言葉が多く場で聞かれるようになってきた。幼稚園児の保護者の傾向について、最近の様子をまとめると、次のようである。

- ① 父親が園の行事に参加するようになった。入園式・卒園式には祖父母まで参加する家庭もある。

少子化のなかで、子どもへの関心が高くなっていることや、子どもの送り

迎えや園行事への参加など、父親の育児参加が見られるようになった。早めに休暇願いを会社に出して園行事に参加する父親が増えているため、園側では、1年の予定表を早く作らざるをえない状況であり、途中の変更には大変なクレームがつくとのことであった。

- ② 園児の父母は、全体としては、物事をよく考え、自分の意見をしっかり持つ人が増えている。
- ③ 子育てに手間と時間をもうすこしかけてほしい親が多くいる。しかし、多くの保護者の園に対する希望は、相変わらず、給食、バス通園、長時間保育の三つである。

子どもが小学校に入ったら給食が始まるので、お弁当は幼稚園の間だけの親子の心の伝え合いの場であるはずであるが、「給食があった方がいい」という手軽さを願う親は相当数いるのである。

オムツも早い時期に心遣いをすれば必ず取れるようになるのだが、紙おむつに頼りすぎている親が多いため、幼稚園に入ってもオムツをつけているため動きにくい子どもがいるのは残念である。

園への送り迎えについても、幼稚園の間だけのことであり、小学校になったら必要なくなることであるので、幼稚園時代に園の行き帰りの親子の時間を楽しんでほしいものである。

- ④ 子育てに対する自分の考え方がまだ不十分なため、子どもに振り回される親もいる。そのため、「子どもの考えを尊重する」ということと「子どもの言いなりになる」ということの違いがよく理解されていない場合が多い。
- ⑤ 母親が、子育て以外にスポーツやグループ活動をしている。

「熱があるので、園に迎えにきてほしい」旨の電話連絡を園から家庭にすると、半数以上は自宅は不在であり、連絡用に届けられていた携帯電話で連絡が取れることが多くなった。保育時間中を活用してスポーツや趣味活動、種々の勉強をしている母親が多く見られる。

- ⑥ 個性の強い母親が多くなった。母親の自己主張が多くなった。「いやなこと」ははっきり言える母親が多くなった。

また、気配りのできる親が少なくなり、自分の子どものことしか考えられない親もいる。他者のために力を尽くす意欲が低下しつつある。

例1) ある園で改築をしようとしたところ、「うちの子が園を卒業してから建築を始めてください」の発言があった。

例2) 小演奏会を園で開催することになり、近くの児童施設の子ども20名を園長が招待したところ、「なんで、よその子に聴かせるんですか?」の意見があった。

- ⑦ 家庭でやるべき基礎的なしつけも、「幼稚園でやってください」と言う親が多くなった。

例) あるテレビ番組で、街頭インタビューの場面があった。アナウンサーが若夫婦に尋ねていた。

「あなたのお子さんはしつけができていますか?」

「いいえ、できてません。」

「では、誰がしつけるのですか?」

「幼稚園におまかせ、おまかせ」

幼稚園と家庭とは、「幼児の成長発達」という車の両輪の役目を負っている。幼稚園教育でなすべきこと、家庭教育でなすべきことをそれぞれ果たした上で両輪が協力することが大切である。

- ⑧ 母親どうしの横の交流を欠く時、孤立して不安定な感情を持つ人も増えた。

このように、園児の保護者の特徴として、以前の保護者と比べてみると、次のことが指摘できる。

- ① 多くの父親が園行事に参加するようになった。
- ② 子どもに手間をかけない親、心をかけない親、言葉をかけない親が多くみられるようになった。「お弁当でなく給食を、送り迎えでなくバス運行を、なるべく長時間の保育を」、の希望が圧倒的に多い。
- ③ 自分の子どものことだけを考える親と、いつも賢明に寛容な考えで園の教育に協力する親との両極化が見られる。

- ④ いろいろなタイプの親がいて、それぞれ個性的である。

3. 保育者を目指す学生の実態

幼稚園における子どもと親について、現在の実態を知るとともに多くの課題が山積していることを再確認できたが、ここでは、幼稚園教諭をめざす学生のプリサービス段階における現状と変化をみていくことにする。

1) 学生にみる幼稚園教職課程履修の変化

1962（昭和 37）年に創設された当短期大学児童教育学科は、44 期生まで 45 年続き、2006（平成 18）年からは子ども学科（3 年制短期大学）に引き継がれた。表 1 は、1975 年 3 月から 10 年ごとの児童教育学科（2 年制）卒業生の進路と 3 年制子ども学科 1 期生の進路を数字にしたものである（2 年制のときは、さらに 1 年間の専攻科に進まなければ保育士資格は取得できなかったため、保育園就職者の数は出ていない）。この表からも、社会の変化とともに、学生の目指す進路の選択基準に変化が見られる。

本学児童教育学科では、免許取得を卒業要件とはしていない。そのため、学生全員が幼稚園免許を取得しているわけではなく、特に 2 年次の教育実習は履修希望者に限られていた。そのため、1980 年代および 1990 年代をみると、約

表 1 児童教育学科卒業生の進路と子ども学科進路内定状況

	1975 年 3 月	1985 年 3 月	1995 年 3 月	2005 年 3 月	2009 年 3 月
一般企業	32	43	21	2	21
幼稚園	38	22	18	22	26
保育園・施設	—	—	—	—	45
専攻科進学	28	25	41	64	—
編入学・進学 (大学/専門学校)	12	3	9	13	7
家事手伝い	4	0	0	0	0
その他	4	12	14	13	6
計	118	105	103	114	105

100名の学生のうち、平均して80～90名の学生のみが幼稚園免許を取得して卒業するという年が続いたことがあり、最少の1991年度は66名のみが幼稚園免許の取得者であり、幼稚園就職者が1ケタの年さえあった。

しかし2000年頃からは、学生のほとんどが幼稚園免許を取得して卒業するようになり、現在までこの傾向は続いている。これは、1990年頃から保育士資格を取得できる専攻科を希望する学生が増えたこと、保育士資格の取得には、幼稚園2種免許取得者を条件にしたこと、企業就職よりも保育者を目指す人が増えたことなどが影響していると思われる。

さらに、3年制の子ども学科になった現在の状況は、幼稚園2種免許と保育士資格の両方を取得したいとする希望者が学科のほとんどを占めている状況である。やはり社会情勢はまだまだ流動的であり、諸資格を持つことの必要性や専門的力が問われる強みを認識してこの学科に入学する学生が増加していることは、オープンキャンパスでの高校生や保護者との相談の中でもうかがい知ることができる。

2009年3月の就職状況では、保育園就職者が幼稚園就職者を上回っている。これは、今年度の在校生の就職希望でも散見されることで、幼稚園教諭よりも保育園の保育士を希望する人が多く見られるようになっている。

その理由として、学生は次の3点を挙げている。

- ① 保育士の資格が卒業とともに取れるようになったので、0～6歳という幅広い年齢の子どもを対象とする保育園での仕事をやってみたい。
- ② 幼稚園のような一人責任体制でなく、保育園のような複数担任制がいい。
- ③ ピアノが弾けないので、保育園を選びたい。

ピアノの件でいうならば、たしかに10年位前までは、ほとんどの学生が入学前にピアノの練習経験をもっていた。しかし最近とみに、「ピアノをさわったことが無い」という入学者が増加しており、楽譜がまったく読めない人もいるので、学科における音楽教育の内容と方法の検討が必要となってきた状況である。

しかし、保育園への就職が多くなった傾向は、喜ぶべきことである。なぜならば、社会的には、働く女性がますます増加しており、保育のニーズは今後も増すばかりであろうが、保育園の待機児問題は未解決のままである。保育士の要請は今後も続くものであり、母になっても職業人として社会に連なる人材として生きていく女性たちを、陰から支え、さらに乳幼児期という一番大切な時期の教育と保育を担う、という保育士の仕事は、ますます重要な位置を占めるからである。専攻科に進まねば保育士資格を得ることができなかった3年前までとは異なり、希望すれば幼稚園免許と保育士資格の両方を取得できるようになった今、保育園就職者が多くなった実態は歓迎すべきである。

2) 実習幼稚園からみた実習生の変化

10年前、20年前と比べて、「学生がずいぶん変わってきた」とはよく言われることである。幼稚園・保育園の園長に伺ったところ、「多くの養成校の学生に一般的に見られる傾向」として、次の指摘があった。指摘された背景として考えられることや今後の手だてとして必要なことを列挙してみよう。

- ① 「多くの学生の中には、真剣に保育者になろうと思っていない人もいるためか、実習に対する熱意を感じられない人もいる。」

学科のほとんど全員が免許を取得して卒業するという最近の状況（教職課程履修の変化の項参照）の中で、「皆が取るから」ということで履修申告し実習には出てみたが、実習は容易いものではなかったということで、実習を途中で中止せざるを得ないケースも出てきている。また、最近とみに、学科選択の理由が学生自身の志望ではなく親の希望だったというケースが出てきている。これは、「免許があれば、いつか役に立つから」という親の勧めで入学はしたものの、履修科目の多さや学業・実習の大変さの現実に向き合うことができない学生がいたり、途中で教職課程を中止する学生も見られるようになってきた。やはり、学生自身の目的意識とやり遂げようとする意志の強さがなければ、耐え切れない場合が出てくるようである。

- ② 「なぜ、どうしてという疑問が少なく、問題意識が無い。」「意欲に欠ける。」
- ③ 「身体が弱い。」「注意するとがっかりしたり、泣いてしまう。」
- ④ 「以前に比べると、必要以上に緊張している。実習では、高望みせず、子どもたちとの生活が楽しめることがまず大切と思われる。」

最近の多くの学生から感じられることの一つに「成果や評価を気にする」、「結果を気にしすぎる」という点がある。特に人の前や全体の前で自分を出したがることは驚くほどである。やってみようと思う前に、うまくできなかったらどうしようという心配があるようである。

実習前のオリエンテーションでは、「実習では失敗することもあるし、失敗してもいい。ご注意くださいたら、次にそれを生かせばいいのだから。子どもとの生活を先ず楽しんでいらっしゃい」と学生に伝えている。しかし、実習などの新しい場面や、評価を伴う対人関係の場では、必要以上に周囲を気にする学生が多く、精神的な強さや柔軟性・やり遂げようとする意欲が望まれるところである。

このように、実習に関しては、幼稚園の教育現場からいろいろのご注意やご指摘をいただくこともあるが、「青山の学生は、やはりいいですね。子どもをよく見て、適切なかわり方をしている」とか「実習録も、よく子どもを捉えて的確に書けている」という評価が多く見られる。

この児童教育学科及び子ども学科で担当した「幼稚園実習」では、プリサードビス段階の学生に「幼児理解を促進するためのプログラム」(表2参照)²⁾の枠組みを構成し、そのための方策や内容を考えてきた。当学科では、「幼稚園実習Ⅰ」を1年次11月に1週間、「幼稚園実習Ⅱ」を2年次6月に3週間の形で学外実習が組まれており、2回の段階的な実習を通して二つの園で幅広く幼児との経験ができるように配慮されている。さらに、各実習の前と後には、実習前授業と実習後授業が用意されており、他の授業と相俟って学生の幼児理解を深めることに役立っている。

表2 プリサービス段階における教師教育プログラムと実習による学生の幼児理解の変容

プ リ サ ー ビ ス 段 階					
1 年 次			2 年 次		
準 備 期	教育実習Ⅰ	経験吸収期	拡充成長期	教育実習Ⅱ	確認整理期
幼稚園や子どもの実態を知る。 (ビデオ利用, 園見学, 場面提示法など)	子どもサイドに立った 幼児理解(1)	実習をふまえて, 幼児理解を進める。 (実習体験の整理・検討)	さらに幼児理解を深める。 (マイクローテイティング, ロールプレイ, 場面提示法も利用)	子どもサイドに立った 幼児理解(2)	総合理解をめざす (幼児・教師・保育の理解および自己理解)
学習のねらいや方策課題	〔一年次実習〕 - 子どもを表面的に, 部分的に見る見方が多い。 〔表面的理解〕 - 子どもは○○だ〔断定的理解〕				
学生の幼児理解の実態	〔二年次実習〕 - 子どもから学ぼうとする姿勢 - 子どもの内面を知ろうとする努力 〔内面的理解〕 - 決めつけずに子どもの多面性を見るようになる〔柔軟性のある理解〕 - 一人一人の子どもの知ろうとする 〔個別的な理解〕				

プリサービス段階の幼児理解プログラムにより、1年次1週間の実習後の幼児理解に関する記述と2年次3週間の実習後の幼児理解に関する記述を見ると、学生の幼児理解が大きく変わってくることがわかる³⁾。例えば、1年次の教育実習Ⅰでは、子どもとの生活に初めて1週間入ってみて、学生自身が予想していた子ども像との違いに対する驚きが大きく、また、子どもの言葉や行動からの表面的理解に終始している。それに比べて、2年次の教育実習では、学生たちは、子どもの心の中を知ろうと努め、行動の裏に隠されたものを子どもの立場になって考えてみようとする内面的理解への努力が読みとれる。さらに、1年次実習においては、「子どもは……」という一方的な見方をしていたが、2年次の実習では、子どもの多面性や一人ひとりの個性を見ていこうとする見方が出てきており、学生の子どもを見る目や子どもとのかかわり方が大きく変化したことを知ることができる。

こうして毎年の教育実習をみてくると、時代が変わり学生が変わるといっても、対象とする幼児に対する真摯な気持ちで保育を考えていこうとする実習生たちの意欲がある限りは、学科の教育理念は継続されるのである。

4. 幼稚園教育の課題

これまで、幼稚園の子どもや保護者の日頃の状況を通して、幼稚園教育の諸問題をみてきたが、これらを解決するための今後の幼稚園教育の課題を列举すると次のようになる。

1. 日本の子どもたちの置かれた状況の再確認と問題解決のための施策を考えること。

子どもたちは、彼らを取りまく環境の中でその影響を受けながら成長していく。子どもの周囲にいる私たち大人はその点で大きな責任を負っている。特にその大人の中でも幼児教育の任に当たる保育者の責任は大きい。

子どもに不要と思われる環境は現状から取り除く工夫が必要であるし、動かせない環境の場合は、子どもにとっての損害を小さくするための工夫を凝らす必要がある。子ども時代を失い、子どもの広場を失いつつある子どもたちに、

望ましい成長発達に少しでも役立つ環境づくりのための工夫と方策を考えていく必要がある。

2. 親の置かれた状況も閉塞的な孤立した形であることが多い。育児に関して、オープンに相談できるシステムをつくり、親を励まし、また、親が学び合える方法を構築する必要がある。

乳幼児期の親は、年齢的にも初めての育児・子育てに当たっている人が多い。多くのことが初めて出会うことであり、予知できないことも多い。さらに、我が子のこととなれば、自分たちのことを一番大事に考えるのは当然のことである。

幼稚園の保護者との連携を進めていく場合にも、こうした親の立場を十分知っていて相談を受けたり話し合いを進めることが大切である。

3. プリサービス段階の教師教育の在り方としては、実習前、実習中、実習後などこれまでに引き続いての学生への細やかな指導・サービスが必要である。その際、子どもへ教えるための教材研究を進めるのではなく、これまでどおり、謙虚に幼児から学ぶ姿勢をとりながら、幼児理解を深め、幼児に寄り添って適切ななかかわり方を選び取れる保育者を目指したいものである。

おわりに

最後に、今後の幼稚園教育の在り方を考えていくときに、日本のフレーベルといわれた倉橋惣三が「就学前教育の目的」⁴⁾で述べているように、幼稚園教育の目指すところは、生活活力そのものであり、植物にたとえれば、地味な根っこに当たる部分の教育であるという原点に立ち戻ることがやはり必要と考えられる。

倉橋の「生活活力」という言葉は、幼児一人ひとりが意欲と行動力と集中力をもって生活していく力としてこれからこそ必要となるものである。また、倉橋は、室内で恩物に集中するよりも太陽と新鮮な空気の下で遊ぶことを奨励した。こうした原点に立ち戻って子どもの成長を見守ることが肝要と思われる。

さらに、幼児理解を促進するための教師教育を研究してきた筆者にとっては、プリサービス段階とインサービス段階との統合によって初めて教師教育が成就することはこれまで主張してきたとおりである⁵⁾。すなわち、プリサービス段階プラス教育現場に入って3年間のインサービストレーニングという共同体制によってこそ幼稚園教師は育つのである。短期大学を卒業して幼稚園という教育現場に入った時の受け入れ側幼稚園が、少なくとも3年間は初心者育てる姿勢があって初めてこのプログラムは完成するのであり、日本の幼稚園教育の将来はこうした3年間の園側の育て方に大きくかかっていることを指摘しておきたい。

注

- 1) 幼稚園設置基準 改正平成18年3月31日 文部科学省令第22号
第3章 施設及び設備 第7条2 幼稚園の施設及び設備は、指導上、保健衛生上、安全上及び管理上適切なものでなければならない。(安全上が入る)
第10条幼稚園には、学級数及び幼児数に応じ、教育上、保健衛生上及び安全上必要な種類及び数の園具及び教具を備えなければならない。(安全上が入る)
- 2) 志賀智江「幼児理解促進のための教師教育に関する研究」風間書房, 2001, p. 191
- 3) 志賀智江「幼稚園教育における「幼児理解の研究」——その2 教育実習を通してみた幼児理解の変容効果」『青山学院女子短期大学紀要』第47輯, 1993, pp. 95～116
- 4) 倉橋惣三「就学前教育の目的」倉橋惣三選集第3巻, p. 423
「人生教育の全過程に対する基本として、真乎重要なものは、知能の早き獲得にあらずして、生命の発展勢力の増進と統制とにある。無限の元気であり、多面の興味であり、不断の試行力であり、しかして、年齢に相応せる適度の自己統制とである。皆これ、知識の成果ではなくして、生活活力そのものである。生活活力は根の力である。すなわち、就学前教育は根の教育である。根の力は、自己発展力である。すなわち、就学前教育は自己発展力の教育である。教育はしばしば余りに多きを求める。葉を求め、花を求め、果実を求める。換言すれば、結果を求める。しかも、就学前は、未だ結果を求むべき時期ではない。結果は遠きにある。しかも自然にまつ。今はただひたすらに根の力を養うべきである。」
- 5) 志賀智江「幼児理解促進のための教師教育に関する研究」風間書房2001, 第4章2節「インサービス段階における教師教育プログラムの試み」